The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	久米田寺と開口神社へ
Author(s)	仲田, 應弘
Citation	懐徳. 1934, 12, p. 41-45
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88914
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

久米田寺と開口神社へ

仲田應弘

八時五分、阪和久米田驛へ着く。乘る人々はあつても、降りたのは私だけだ、ややあつて桑原刀自が來られ、顏だけ知つた人等も來た。

驛前は俄かに騷々しくなつた。此の村の小學生は、毎日掃除を分擔するよしである。

日曜のあしたいきほひ學童らさらひを使ひ埃立てつゝ

驛前に掃除終へたる學童は思もおもひに靴干してをり

溝川に泥をかぶる泥鰌を見ながら歩きそめると、いつか寺の近くで中村先生の御一行を振りかへることが出來た。土地の者が先へ行くといふことがあるか、との誰かの聲に互ひに微苦笑が洩れる。

久米田池畔に小休、中村先生は、池に關する寺の權力について、久米田寺、即ち隆池院は此の池の主であつて、田地に水を出すにしても寺の許しがなくてはいけなかつた。そこに楠公が目をつけて、寺と結びついたものだ等の御話があつた。

この池は聖武天皇の神龜二年二月五日から起工して、十四年目の天平十年の秋に出來上り、竣工式には畏くも聖武天皇は光明皇后と共に、

文武百官を從へさせられて行幸されたと云ひ、周圍一里二町、水面積六十一町八段、灌漑段別實に三百六十七町餘歩に及ぶと云はれてゐる。

寺門を入つて左手へ、方丈へゆく。庭には桔梗が五六寸のびてゐて、時來れば蕾を持ついきほひを示してゐる。

座敷に古文書が展げられた。久米田寺の古文書といつて、古文書學上有名なもので、斯道にある者で、久米田寺の古文書を知らねば恥の樣に云はれてゐる位で、その内二十九通は國寶に指定されてゐる。

昔は、古文書は國寶になつてゐなかつたが、この寺のたけは、早うから指定されてゐたので、どれだけ、貴重視されたかが解るのである。中でも正成のはよく、三十八才位の筆のよしだ。

國寶外に、傳行基筆緣起といふのがあるが天平頃の書風を摸したものかと尋ねて見ても、人前では云はない方がいいさうである。

古文書に依つて見ると、明知上人以後、南朝の年號は使用されなくなつたので、漸次、寺勢が北朝に傾いていつたのであらう。

古文書について先生から種々、懇篤なる御說明があつて、晝食にする。

寺の裏に、光明皇后の御墓だといふ小丘があつて、碑名もあるが、後の人が、擔いだものであらう。

橘諸兄公の墓だといふ古墳へ登る。前方後圓式で、後圓の頂きには、一丈位の寶篋印塔があつて、側の小碑に、橘諸兄塚とある。處々に埴輪圓筒を埋めた趾のあるのを見ると、諸兄公よ

りずつと古く仁德期のものだらうと、先生は云はれた。

同行の塩田悅子さんは

諸兄公の古墳の頂きの涼しきに笹わけて埴輪圓筒探す

の歌を得た。

初め珍らしがつた人々も、驛へ來た時は忘れものをしたかの樣に置いてゆく。

阪和で堺驛へ、堺バスで大寺、即ち開口神社へ

開口神社の祭神は、事勝國勝長狹命卽ち、塩土老翁が主神で、素戔嗚尊、生國魂命も祀られてある。

中村先生の御話では、大念佛寺が大寺と呼ばれる樣になつたさうで、此處は元、住吉神社の神宮寺で、神宮寺の鎭守が開口神社である。

佛敎入國以來、それを信ずるか否かの爭ひがあり、蘇我物部兩氏の對抗から、排斥派の物部氏が亡び、蘇我氏の勢力が盛大になると共に、佛敎も追々信じられる樣になつた。

大佛建立も、反對はあつたが、宇佐八幡の神託があつたので、建立されたのであつた。

それで神は、佛を擁護して下さるのだと云ふので、寺の近くに神を祭る樣になつた。即ち、これが鎭守の社である。古いのでは、東大寺の鎭守が手向山八幡である。

日本の神は、我々と同じ形ち、同じ心の持主で、元來は衆生だつた。そこで迷ひなり煩惱を持つてゐたであらう。それを去つて悟りを開かれようとしてゐた。

迷ひがあるから佛を守つて下さるのだ。聞法されるのだ。

神社の境内に佛を祭り、御經を寫したりするので、寺が建てられる樣になつた。

寺には鎭守、神社には神宮寺が出來て、社寺が並立したのである。

境内の幼稚園で、お話が終つてから、長持で運ばれた古文書を見せて戴く。

大寺緣起三卷は、明治四十三年に國寶に指定された。これは元祿三年關白近衛基熙の寄進されたもので、詞書は公卿二十五人、繪は土佐光起の筆になつてゐる。德川初期のものとして國寶に指定されたのは珍しいのであるが、如何に此の書畫の當時として勝れてゐたかが解る。寄進された年は光起は七十四歲、死の前年であるが、畫かれたのは、精力的な時期であつたかも知れない。卷頭の書は特に勝れてゐると思つたが、弱いと云はれた。個々の筆法の移變を見てゆくのは、この繪卷にしか見られぬものである。これらの文字は平安朝のものから見ると弱いのであるが、現代假名の三筆と云はれる人々のは、猶これより弱い、千蔭は近世をぬかして上代に歸らうとし、阪正臣は、上代の豐潤さをとり入れようとしたことも話された。

德川時代最後の京都所司代が、七寸位の花押で威嚴を保つてゐるのや、文治三年三月三日、尼妙惠の指劃を書きいれたもの、又「ちちなや、ちや〳〵」として印があり、「たいひめの方へ」と宛名してあるのが、文明七年のである。文明頃に印を持つてゐるのは餘程の大家でなくては

叶はぬ事のよしだ。

當時かうした通名か、戯姓名かが用ゐられてゐる事に興味が繫がるのである。

三上氏の厚意で大寺餅が幾鉢も運ばれた。幼稚園で「あんころもち」を戴くのは、何かゆかりがある樣に思へる。

園兒達の干し忘れられた粘土細工に興味を誘はれながらも、塔から羽音を響かせながら鳩の群に、明るい笑みを湛へてゐられる中村先生のお顏と別れた。

懷德堂記事

▲懷德堂遺物寄贈　昭和八年九月二十三日中井木菟麻呂氏より懷德堂甲種遺物として左の四十七点を寄贈せらる。

學問所建立記錄　懷德堂定約附記　懷德堂內事記
同　外事記　學校公務記錄　懷德堂義金簿
御同志中相談覺　三宅宰藏變宅ニ付御同志中懸合覺
逸史献上記錄　義金助成金簿　助成金書類
竹山先生遺狀　懷德書院揭示　學問所建立文書(上)
同　(下)　學校再建文書　大阪學校書類
學校公務書類　衙尹御入諸書　學問所來歷
懷德堂記額面　白鹿洞揭示畫本額面　曲肱榭額面
己有園額榻本　懷德堂講堂楣上小障宋六君子圖
懷德堂壁書三面　入德門聯　懷德堂講堂障子歸馬放牛圖
懷德堂繪圖屏風　石菴書懷德堂幅　朱文公大書四訓畫本
冽菴先生雙幅　竹山先生咏福壽草詩幅
寒泉先生出懷德堂歌　懷德堂考定中庸　中庸錯簡說
懷德堂記帖　勢語通　蘭洲先生刪正日本書記
蘭洲先生遺本康熙字典　萬年先生論孟首章講義
懷德堂本大日本史　菊章刀子　木司令
螺鈿韻匣